

文部科学省

「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」

# ゆめ・やりたいこと実現センター



社会福祉法人 一麦会 (麦の郷)

# ゆめ・やりたいこと 実現センター

人は生涯にわたって学習を続け発達する存在です。

障害があっても誰もが健康で文化的で豊かな生活をおくることができる（憲法第25条：生存権）

そして学ぶことで幸せを追求すること（憲法第13条：幸福追求権）は私たちの権利です。

安心して地域で生きる（衣・食・住・働が保障されている安心）

安心して地域で生きる（学びや活動・役割が保障される安心）

そんな私たち・仲間たちの「ゆめ」や「やりたいこと」を実現させるセンターです！

## 「学び合う」として「創り合う」

### 夕刻のたまり場(居場所)

～ゆっくりしたり、食べたり、飲んだり話したり～

毎週水曜日 16時～20時

フリーな居場所(場所:粉河山崎邸)

やりたいことを  
**提案・企画・実現！**  
みんなで創る活動

### やりたいこと講座

「興味はあるけどしたことがない」「やってみたいけどひとりではむずかしい。」

そんな「やってみたい！」を出し合って実現していく

### つぶやきサポート

ぐちゃや困りごと、うれしいことを共有できる場

支援者⇄被支援者の関係ではなく共に生きる“なかま”として受けとめ、分かち合う

### 逸材発掘・人材バンク

地域には生涯学習のサポーターがいっぱい！  
「こんなことができます！」を募り人材バンクに登録「教える」のではなく「一緒に」を大切に人材発信の拠点に

### 連携協議会

関係機関・団体等との連携を図り、企画を実施！

探す！既存団体の活動や生涯学習の情報収集

伝える！情報を発信

つながる！（協働する）  
連携して一緒に学ぶ・楽しむ

# 事業報告会の風景から「つながりの生涯学習」の開発へ

堀内秀雄（和歌山大学名誉教授・本事業スーパーバイザー）

## 0 はじめに

生涯学習とは、「人々をなりゆきまかせの客体から、自らの歴史を綴る主体に変えていくものである。」（学習権宣言・1985年ユネスコ・パリ会議）。これは報告会終了後に会場の山崎邸の玄関先で、障害のある息子さんのお母様から「生涯学習の中で、先生がいちばん大切にされている言葉は何ですか？」と問われたときに、お話しした一節です。

人間のコミュニケーションは、いつでも疑問や悩みと「喜怒哀楽の共感」から始まります。

2月11日に開かれた2019年度の事業報告会は、笑い涙ありの心に沁みるひとときとなりました。障害のある当事者たちは支援学校「卒業後」に、学びの継続・学び直しの機会がきわめて劣悪な環境に置かれてきました。教育と福祉の谷間で翻弄され、社会システムから「忘れられた存在」かのように放置されてきた、ともいえるでしょう。

事業のこれまでの歩みは本編に譲りますが、国（文科省）が2017（平成29）年、生涯学習政策局内に「障害者学習支援室」を新設したことは画期的な意義を持つものです。その2年後に本事業「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」が全国（1年目は18ヶ所2年目は21ヶ所）でスタートすることになりました。国際障害者年（1981）から36年後に、国連「障害者権利条約」が国会批准（2015）されたことが後押しした背景にあります。

本事業を主管・実施する文科省担当者の熱い思いに正面から応えていきたいものです。私たちも21ヶ所の一員として、この機会を最大限に活用すべきだと考えます。共に学び、共に生きる共生社会を確かなものにしていく貴重なチャンスなのです。そのためには、「①障害者の学びの場づくり、②その担い手・支援者の発掘、③行政を含め多様な社会的資源との協働」という3つの視点が不可欠です。

それらを点→線→面へと構造化することで、「つながりの仕組みづくり」にチャレンジしていきましょう。様々な障害のある当事者を真ん中に据え、生涯学習と人権学習を統合していくことが、40年の歴史で麦の郷が掲げてきた「ほっとけやん」精神です。初心に立ち返り、さらに輝き続けてほしい。

「実現センター」の実践研究は、和歌山県内の各地域と自治体へ、関西圏へ、さらに全国へと情報発信をし、しっかりと届けていきたいものです。

## 1 本事業の着眼と使命は何か

麦の郷が受託した本事業は、いま中間年となる2年目を終えつつあります。

この事業の目的を考察すれば、主対象は障害のある当事者、支援する側の関係者は福祉・社会教育、支援学校を含む学校教育、社会教育・生涯学習の行政・施設、地域の様々な市民活動、保健・医療の専門家及び大学・高等教育機関の研究者等です。

関係性とは、「情報共有・共同参画・協働実践」の3要素を包摂したものです。そのベクトルは「多様」で「総合的」であり、「実践研究」の実態が理屈やイベント主義に陥ってはなりません。

特筆すべきは、居場所（プラットフォーム）の役割を果たす山崎邸（築およそ100年の古民家・JR粉河駅前）という拠点を確保したことです。現場の当事者と共に悪戦苦闘しながら、喜びを共有しあい地域密着の実践研究を検証することが、本事業の省察する意義と目的になります。

## 2 麦の郷「ゆめ・やりたいこと実現センター」が掲げた目標と企画戦略

この実現センターの趣旨は、以下のように位置づけられています。

・・・「人は生涯にわたって学習を続け発達する存在です。

障害があっても誰もが健康で文化的で豊かな生活を送ることができる（憲法 25 条・生存権）、  
そして学ぶことで幸せを追求すること（憲法 13 条・幸福追求権）は、私たちの権利です。

安心して地域で生きる（衣・食・住・働が保障されている安心）

安心して地域で生きる（学びや活動・役割が保障される安心）

そんな私たち・仲間たちの「ゆめ」や「やりたいこと」を実現させるセンターです！

そして企画戦略を次の 4 本柱としています。

・・・「やりたいことを（提案・企画・実現！） みんなで作る活動」

①夕刻のたまり場（居場所）、②shitaina（したいなあ）work shop、③つぶやきサポート、

④逸材発掘・人材バンク。

組織的な場としての連携協議会 → 「①さがす、②伝える、③つながる・協働する」

この戦略は、文科省が 2018（平成 30）年度に実施した「障害者意識調査」で示された障害者本人の意識・ニーズと見事に一致しています。

・・・①「一緒に学習する友人、仲間がいない」→ 71.7%

②「学ぼうとする障害者に対する社会の理解がない」→ 66.3%

③「知りたいことを学ぶための場や学習プログラムが身近にある」→ 32.8%

## 3 2 年の歩みを省察して、3 年目の道を共に耕していこう

### (1) 「実現センター」が歩んだ 2 年間の風景

関係者のみなさまは、この 2 年間の歩みをどのように認識しておられるでしょうか。

その特徴を要約的に絞り込み、私の視座から整理しておきたいと考えます。

1) 1 年目の成果と課題は、昨年の報告書に掲載されています。成果としては

①障害当事者を主人公として、事業の中心に据えることを当初から徹底したこと。

②「夕刻のたまり場」等の事業の拠点となる実現センターを設置したこと。

③「やりたいこと講座」など、多種多彩な 32 講座・延べ 638 名の参加・会場を紀の川市、和歌山市、（番外、金剛山）で開催できたこと。

④各種事業をサポートする地域人材は、資格・特技を持つ専門家を確保できたこと。

課題としては、

⑤成果の①～④の量と質をさらに充実させていくこと。

⑥企画運営機関の連携協議会に、行政や支援団体から幅広く参画者を求めること。

⑦これまで参加できていない当事者等への PR を重視し、参加「実人数」も増やすこと。

⑧県教委や県障害福祉課など、地域の行政（教育・福祉・保健医療）等との連携を強めること。

⑨文科省の指針に基づき、全国の 20 ヶ所の実践研究と連携し学び交流し合うこと。

次に 2 年目の成果については、1 年目に設定した課題をいかに解決してきたかに尽きます。重層的かつ多種多様な実践研究事例と感動的なエピソードは、この報告書とその行間にちりばめられています。

成果としては、

1) 1 年目の①と②はさらに定着させ、実質化してきたこと。当事者が「やりたいこと」を主張し、

自己選択をするケースが続出したことは微笑ましい。

- 2) 活動拠点では、地域文化や祭りなど多様な住民活動と共存し、相互理解と共同実践に発展した。
- 3) 講座等の事業は、54 講座、延べ参加 1057 名、毎回約 150 関係団体に広報を配布し、新規に案内物を掲示してくれる事業所が出現した。会場も 3 地域（+橋本市、番外 西宮市）に拡大して展開できた。
- 4) 当事者、支援者、講師等を囲んで、カフェや夕食づくり、忘年会など交流が活発化した。
- 5) 県生涯学習課や和歌山大学等が、新たに連携協議会へ参画が実現した。
- 6) 文科省主催の「共生社会コンファレンス」へ事務局等が積極的に参加し、学習交流を深めた。

## (2) 真価が試される 3 年目の道程へ

本事業は、3 年間でワンクールとする受託事業です。もとより、障害者の生涯を通じた多様で総合的な学習活動の充実、短期間で完結・解決するものではありません。まだ、緒に就いたばかりです。10 年～ 20 年かけて成熟する中長期的な持続発展の見通しが必要です。最終年度となる 3 年目がカギになるでしょう。当初の目標に立ち返り、節目の一年となる実践研究の質が試されていきます。

重要課題の一案として、以下の 4 点を提示しておきます。たたき台にしてご検討をお願いします。

- 1) 事業終了以降のめざすべき実践研究活動は何か。航海図と羅針盤を設計すること。
- 2) 地域づくりの 2 つの核づくり。当事者。住民と行政機関との協働の質の豊かさを追求する。
- 3) 地元の教育委員会及び福祉関係機関との「つながりの実質化」を重点化する。
- 4) 県生涯学習課等と協議を深め、県全体の「障害者の生涯学習」施策を共同開発していく。

## 4 スーパーバイザーの「ひとりごと」

### (1) 私は人間が好きです。

障害者問題とのルーツは、30 年前に大阪のある自治体で障害福祉係長の仕事が出発になります。

E. ハンソンさんと対談した時、「人権とは、人間がメチャクチャにされないことよ」と話された優しい表情が印象に残っています。最近、NHK ドラマ『心の傷を癒すということ』を視聴しました。阪神淡路大震災時に心のケアに奔走した精神科医の安さんは、肝臓がんを患い死の淵の病床で泣きます。「心のケアってなんかわかったわ。だれもひとりにせえへん！ということや」と。涙が止まりませんでした。社会教育・生涯学習の研究者、いや一人の人間として原点回帰させられた瞬間でした。

第一部で津田先生が講演された「葛藤を学びに変える」、「インクルーシブな社会をめざす実践の省察」と重なり胸に響きました。この事業の本質は、「ちがいを楽しむ」、異質が生み出す葛藤を省察しあう研究実践です。障害者が「だれでも・どこでも・いつからでも」学び合える生涯学習！そんな希望の社会が、この国の大地にしっかりと芽吹き、そして根付いてほしいと願うばかりです。

### (2) シェイクスピアの悲劇『マクベス』を観劇

「善は悪、悪は善」…人間は誰もが持っている野心や猜疑心、ごう慢さやおののき、自己を正当化することでしか生きられない弱さ等を見事に表現した舞台でした。時代を超えた人間の業なのでしょうか。

今の社会に蔓延するウソ・ごまかし・隠ぺいの日常化。忖度する従順な人間失格者の群れにモラル劣化を感じます。私が出会った障害のある人たちは、日々悲喜劇の連続でも、そんな非人間的な人々は一人もいません。人間が壊した社会は、人間の英知と行動力で立て直すことができます。新型コロナウイルスの感染対策は後手後手の迷走を繰り返し、「医療崩壊」、「国家崩壊」の危うさを心配しています。

### (3) SDGs（持続可能な開発目標）をご存じでしょうか。

「つづかない」世界を「つづく」世界に変革する「貧困のない」「持続可能な」世界をつくる国連の目

標のことです。めざす社会像は2つ、「①誰ひとり取り残さない、②最も遠くに取り残されている人々こそ、第一に手が届く」。大学の講義で学生たちと討論すると、現実とのギャップに驚き、いらだちの意見が噴出することもありました。若い世代の理性と感性に希望を託したい思いです。

しかし、「障害者権利条約」が批准され、その第24条に「生涯学習の機会の確保」が明文化されました。人類世界の長い歴史で、排除（エクスクルージョン）されてきた当事者の運動と支援者や関係機関の尽力によって獲得してきたものです。やっとここまで辿りつけた、と考え直すことにしましょう。

まだまだ問題は山積みです。麦の郷が受託した実践研究事業は、このような世界的視野からとらえ直してみると、私たちの使命や役割は世界につながっていることが理解できます。

(4) この事業を「求心性と遠心性の統合」から省察してみます。謝意をお伝えさせてください。

ポズック楽団の演奏者のみなさま、表情と迫力がコラボして最高でした。感動をありがとう！生ライブはいつも新しい時空間を創り上げ、多様な観客の心の奥底を多彩に洗い流してくれます。

「ゆめ・やり Café」のコーヒーは、香り高く美味しかったですよ。みなさんのおもてなしも喫茶店のマスターのようでした。サポートしていただいたCafé コンシェルジュたちの援助のおかげです。

この事業を担当した野中・藤本の両コーディネーターは、企画運営を支える「縁の下の力持ち」の役割を果たしてくれました。麦の郷で20年以上、様々な障害のある仲間と現場で真正面から寄り添ってきた福祉実践者の底力でしょう。ご苦労様だけではすまない、気配りと情熱を感じました。

報告書の編集委員の方々（島・大田・藤本の三氏）には頭が下がります。目次の構成、テープ起こし、紙面のレイアウト、掲載者との密接な調整など、短期間の編集作業の煩雑さを乗り切ってくださいました。島さんは子ども文化、大田さんは元支援学校教員で障害者スポーツの「専門家」です。総括者の藤本さんの奮闘には感謝の言葉しかありません。以上が、「求心性」にまつわる人間ドラマです。

「遠心性」とはアウトリーチの概念であり、外とつながり支え合う関係です。トークセッションで文科省の峯さんは、当事者や家族の話を中心に傾聴され、居場所の存在と講座数と多彩さに注目されました。さらに、地元自治体との相互連携、活動を全国発信する重要性を示唆していただきました。県教委の堂本生涯学習課長は、「県としても支援できることはします」と激励のエールを送ってくれました。

(5) ヨコ軸・タテ軸・ナナメ軸、「生きててよかった」の「伝え合う」文化を育てる。

当事者と麦の郷のつながりをヨコ軸、講座の講師・地域の住民団体・ボランティア等の支援者をタテ軸とするなら、地元の公共的機関（行政の各部局等）をナナメ軸と考えることができます。ナナメ軸との循環は次年度の大切な宿題です。「だれひとり取り残さない」まちづくりの基盤になるものです。

映画『男はつらいよ』の心に残るシーン。甥の満男が寅さんに尋ねます。「おじさん、人間は何のために生きてるのかな」。寅次郎『何ていうかな、ほら、あー生まれてきてよかってなった思うことが何べんかあるだろう、そのために人間生きてんじゃねえのか』。演出家・平田オリザさんとの対話では「わかりあうつもりでなく、きちんと伝えあうこと」の大切さを学びました。

格差と貧困、人間関係の行き違いなど、生きづらく殺伐とした時代です。「夕刻のたまり場」は希望の小さな宇宙です。障害のある人だけでなく、誰もが求める「共感のプラットホーム」だと思えます。

異質なものと共生しつながりのナナメ軸を貫き「伝えあいの文化」で、3年目を迎えたいものです。

「生きていてよかった」、と思える生活と人生、生涯学習を、すべての人に！」

## 2019年度 やりたいこと講座一覧

＜54 講座 延べ参加人数 1057 名＞会場：紀の川市 41 回 和歌山市 11 回 橋本市 1 回（西宮市 1 回）

講座名	日時	主催・協働	会場	人数
ちぎり絵講座（春） 講師：家族会のみなさん	2019.4.4（木） 10:00～	ゆめ・やりたいこと実現センター 紀の川市精神障害者家族会	紀の川市	16名
○と△アート講座 講師：島久美子さん	2019.4.24（水） 18:00～	ゆめ・やりたいこと実現センター 共助のまちづくり協会	紀の川市	21名
音楽で学ぼう中国の文化 講師：朋友(小薺さん佐古さん)	2019.5.15（水） 13:30～	ゆめ・やりたいこと実現センター	紀の川市	24名
ヨガで心もからだも気持ちよく 講師：山本まりこさん	2019.6.2（日） 16:00～	ゆめ・やりたいこと実現センター	紀の川市	13名
フェルトでつくろうフルツコースター 講師：尾方千春さん	2019.6.5（水） 18:00～	ゆめ・やりたいこと実現センター 紀の川市地域おこし協力隊	紀の川市	17名
トークと絵本のつどい 講師：イラスト作家 Rui さん	2019.6.11（火） 14:00～	ゆめ・やりたいこと実現センター	紀の川市	25名
世界にひとつのマグネットづくり 講師：島久美子さん	2019.6.26（水） 13:30～	ゆめ・やりたいこと実現センター 共助のまちづくり協会	和歌山市	6名
○と△アート 講師：島久美子さん	2019.6.28（金） 13:30～	ゆめ・やりたいこと実現センター 共助のまちづくり協会	紀の川市	15名
フェルトでつくろうフルツコースター 講師：島久美子さん	2019.6.30（日） 13:30～	ゆめ・やりたいこと実現センター 共助のまちづくり協会	和歌山市	8名
俳句に挑戦してみよう（夏） 講師：島 楽猫さん	2019.7.3（水） 18:00～	ゆめ・やりたいこと実現センター 共助のまちづくり協会	紀の川市	16名
多肉植物の寄せ植えをつくろう 講師：台丸谷久実さん	2019.7.17（水） 18:00～	ゆめ・やりたいこと実現センター 紀の川市地域おこし協力隊	紀の川市	18名
ちぎり絵講座 講師：梅本陽子さん	2019.7.25（木） 10:00～	ゆめ・やりたいこと実現センター 紀の川市精神障害者家族会	紀の川市	20名
折り染めにチャレンジ 講師：島久美子さん	2019.7.26（金） 13:30～	ゆめ・やりたいこと実現センター 共助のまちづくり協会	紀の川市	13名
ヨガで心もからだも気持ちよく 講師：山本まりこさん	2019.7.28（日） 10:00～	ゆめ・やりたいこと実現センター 就業・生活支援センターつれもて	和歌山市	16名
折り染めにチャレンジ 講師：島久美子さん	2019.7.31（水） 18:00～	ゆめ・やりたいこと実現センター 共助のまちづくり協会	紀の川市	12名
デニムアートをしよう 講師：名倉くみ子さん	2019.8.7（水） 19:00～	ゆめ・やりたいこと実現センター	紀の川市	18名
ポリ袋クッキング 講師：松下喜美代さん	2019.8.14（水） 17:00～	ゆめ・やりたいこと実現センター なまかの会	紀の川市	12名

かんたん！パソコン講座① 講師：永井契嗣さん	2019.8.21（水） 13:30～	ゆめ・やりたいこと実現センター 麦の郷紀の川生活支援センター	紀の川市	8名
プラ板アクサセリーづくり 講師：尾方千春さん	2019.8.21（水） 18:00～	ゆめ・やりたいこと実現センター 紀の川市地域おこし協力隊	紀の川市	23名
折り染めにチャレンジ 講師：島久美子さん	2019.8.25（日） 13:30～	ゆめ・やりたいこと実現センター 共助のまちづくり協会	和歌山市	7名
音楽療法を体験しよう♪ 講師：音楽グループ「さくらもち」	2019.9.1（日） 13:30～	実現センター・むぎびと 共助のまちづくり協会	和歌山市	30名
俳句に挑戦してみよう（秋） 講師：島 楽猫さん	2019.9.4（水） 18:00～	ゆめ・やりたいこと実現センター 共助のまちづくり協会	紀の川市	13名
ちぎり絵講座 in 橋本 講師：貞包未奈江さん	2019.9.18（水） 13:00～	ゆめ・やりたいこと実現センター 橋本保健所	橋本市	6名
世界にひとつのマグネットづくり 講師：島久美子さん	2019.9.18（水） 18:00～	ゆめ・やりたいこと実現センター 共助のまちづくり協会	紀の川市	16名
ちぎり絵講座（秋） 講師：梅本陽子さん	2019.9.19（木） 10:00～	ゆめ・やりたいこと実現センター 紀の川市精神障害者家族会	紀の川市	17名
書道でアート 講師：岩崎碧洞さん	2019.9.21（土） 18:30～	ゆめ・やりたいこと実現センター すばらしき仲間たち	和歌山市	32名
多肉植物の寄せ植えをつくろう 講師：台丸谷久実さん	2019.10.4（金） 10:00～	ゆめ・やりたいこと実現センター	紀の川市	17名
かんたん！パソコン講座② 講師：永井契嗣さん	2019.10.9（水） 13:30～	ゆめ・やりたいこと実現センター 麦の郷紀の川生活支援センター	紀の川市	11名
毛糸のブローチ・ストラップづくり 講師：島久美子さん	2019.10.9（水） 18:00～	ゆめ・やりたいこと実現センター 共助のまちづくり協会	紀の川市	19名
音楽で学ぼう中国の文化 講師：朋友(小薺さん佐古さん)	2019.10.16（水） 13:30～	実現センター・麦の郷和歌山生活支援センター・共助のまちづくり協会	和歌山市	17名
音楽療法を体験しよう♪ 講師：音楽グループ「さくらもち」	2019.10.18（金） 13:30～	ゆめ・やりたいこと実現センター 共助のまちづくり協会	紀の川市	34名
やりくりの達人になろう講座 講師：田村富美さん	2019.10.30（水） 18:00～	ゆめ・やりたいこと実現センター	紀の川市	31名
廃線敷ハイキング 講師：大田昌彦さん	2019.11.2（土） 7:30～	実現センター、伊都橋本青年学級 スペシャルオリンピックス日本・和歌山	西宮市	23名
マカロニアート 講師：島久美子さん	2019.11.3（日） 10:30～	ゆめ・やりたいこと実現センター （福）三水会	紀の川市	32名
ジャンベを楽しもう♪ 講師：アボロッサム	2019.11.3（日） 12:00～	共助のまちづくり協会	紀の川市	66名
マカロニアート 講師：島久美子さん	2019.11.9（土） 18:30～	ゆめ・やりたいこと実現センター すばらしき仲間たち	和歌山市	30名

かんたん！パソコン講座③ 講師：永井契嗣さん	2019.11.13（水） 13:30～	ゆめ・やりたいこと実現センター 麦の郷紀の川生活支援センター	紀の川市	8名
マカロニアート 講師：島久美子さん	2019.11.13（水） 17:30～	ゆめ・やりたいこと実現センター 共助のまちづくり協会	紀の川市	17名
デニムアートをしよう 講師：名倉くみ子さん	2019.11.15（金） 13:30～	ゆめ・やりたいこと実現センター	紀の川市	14名
チェンバーループの音色を楽しもう♪ 講師：古川亜友美さんと伸子さん	2019.11.27（水） 18:00～	ゆめ・やりたいこと実現センター	紀の川市	34名
段ボールアート 講師：溝端秀明さん	2019.12.1（日） 10:00～	ゆめ・やりたいこと実現センター 共助のまちづくり協会	和歌山市	56名
ストレッチ講座 講師：中村正男さん	2019.12.4（水） 18:00～	ゆめ・やりたいこと実現センター スペシャルオリンピックス日本・和歌山	紀の川市	23名
ちぎり絵講座（冬） 講師：梅本陽子さん	2019.12.5（木） 10:00～	ゆめ・やりたいこと実現センター 紀の川市精神障害者家族会	紀の川市	21名
俳句に挑戦してみよう（冬） 講師：島 楽猫さん	2019.12.11（水） 18:00～	ゆめ・やりたいこと実現センター 共助のまちづくり協会	紀の川市	17名
もこもこマグネット講座 講師：島久美子さん	2019.12.22（日） 13:30～	ゆめ・やりたいこと実現センター 共助のまちづくり協会	和歌山市	12名
新年のフラワーアレンジ 講師：仁井村和子さん	2020.1.11（土） 13:30～	ゆめ・やりたいこと実現センター 共助のまちづくり協会	和歌山市	10名
クッキング講座 講師：中浦ふみよさん	2020.1.12（日） 10:30～	ゆめ・やりたいこと実現センター	紀の川市	14名
バリ島の楽しさを味わおう講座 講師：石渡祥子さん	2020.1.15（水） 18:00～	ゆめ・やりたいこと実現センター 紀の川市地域おこし協力隊	紀の川市	17名
カラオケ講座 講師：津嶋佳奈さん	2020.1.26（日） 14:00～	ゆめ・やりたいこと実現センター 那賀・伊都橋本青年学級	紀の川市	38名
かんたん！パソコン講座④ 講師：永井契嗣さん	2020.1.29（水） 13:30～	ゆめ・やりたいこと実現センター 麦の郷紀の川生活支援センター	紀の川市	7名
おいしいコーヒーの淹れ方講座 講師：創カフェ カフェスタッフ	2020.1.29（水） 16:00～	ゆめ・やりたいこと実現センター ハートフルハウス創	紀の川市	12名
寄せ植えをつくろう 講師：台丸谷久実さん	2020.2.4（火） 13:30～	ゆめ・やりたいこと実現センター	紀の川市	10名
ねずみアート 講師：島久美子さん	2020.2.5（水） 17:00～	ゆめ・やりたいこと実現センター 共助のまちづくり協会	紀の川市	21名
マジック講座 講師：瀧本尋紀さん	2020.2.12（水） 18:00～	ゆめ・やりたいこと実現センター	紀の川市	24名

\*2020.3.7（土）に予定していました『ヨガで心もからだも気持ちよく』講座は、新型コロナウイルス感染症対策の関係により中止しました。

## <講座についての感想>

### —障害のある人より—

- ・いつも股関節が硬いけど、『ストレッチ講座』で柔らかくなったのでよかった。難しいものもあった。
- ・『ポリ袋クッキング』を体験して、災害の時でも温かいものを食べることができるということを知ってよかった。
- ・『俳句』は難しいと思っていたけど、みんなで協力し合ってでき上がるので楽しくできた。
- ・いろいろな物を講座で作るのは楽しいし、自分の好きな物が作れてうれしい。
- ・『毛糸でブローチとストラップ』を作るっていうアイデアがすごいし、自分もできてよかった。
- ・『ちぎり絵』を季節ごとにできるのがうれしいし、癒される。これからも続けて行ってほしい。
- ・『寄せ植え講座』で植えたものが成長するのを見るのがうれしい。少し大きくなってきたので鉢を分けた。
- ・普段ひとりではしないことを講座でできるのでいい勉強になる。
- ・興味はあったけど、植えた事がなかったので「寄せ植えをしたい!」と言って実現した『寄せ植え講座』。小さいカップ（入れ物）に自分の世界観を表現できたのがすごくうれしかった。小さな自然を作ったという感じだった。
- ・『デニムアート』がうまくできたので、またしたい。自分が描いた絵が浮かび上がってきて感動した。
- ・『俳句』は初め訳が分からなかったけど、やってみたらおもしろかった。
- ・『マジック講座』で教えてもらってうまくできたのでうれしかった。
- ・『音楽療法を体験しよう♪』で、みんなで歌って知らない歌もあったけど楽しめた。
- ・『クッキング講座』に参加し、自分にとっては「はじめまして」の人ばかりだったけど、笑顔とあいさつさえあれば、すぐ馴染めた。みんなと料理ができて楽しかったし、豚汁おいしかった。
- ・いい人ばかりが集まっていて、一緒に講座ができてうれしかった。
- ・『クッキング講座』で卵をむいたり団子やコロッケをこねたりして楽しかったし、すごくおいしかった。
- ・『ヨガでこころもからだも気持ちよく講座』をした日にすごく気持ちよく眠ることができた。
- ・初めての人と一緒に講座をしたけど、初めてではない感じで打ち解けられてよかった。
- ・人見知りもあって不安だったけど、ずっと入れてもらえたので講座に来てよかった。
- ・『バリ島の楽しさを味わおう講座』の先生に「ぼく、バリ島に何回か行ったことある」って伝えたら、「じゃあ助手をしてくれる?」と頼まれて、経験したことを話せたことがうれしかった。緊張せずに話せたし、みんなしっかり聞いてくれて楽しんでいたのがよかった。自分が役に立つことがあればまた話したい。御朱印のことや旅行やお城のこと、A型事業所で接客の仕事をしているので接客の話とかもできる。

### —講師より—

- ・人には秘めた才能があると感じる。それを活かしていければいいと思う。講座をきっかけに、いろいろな才能が目覚めたらいいなと思う。
- ・教えるつもりで来たけれど、丁寧に取り組んでいる姿を見て、逆に教えられた。
- ・関わり合って一緒に講座ができることはすばらしい。
- ・みんな率先してしようという意欲的な気持ちがあって、料理がさっさとできた。
- ・『バリ島の楽しさを味わおう講座』 講師：石渡祥子さんより

お話をいただいた時には、とにかく「楽しめる時間にしよう」と思いました。メンバーは日中に作業所などで仕事をして疲れる事などもあるでしょうし、リフレッシュの場になればと考え、押し付けにならない講座にしたいと思いました。

一方的に旅の話をして聞いてもらうだけではなく、双方向で交流するためにクイズをしたり質問したり、流れを考えただけで私自身とても楽しみました。さらに嬉しかったのは、メンバーのひとりが助手をしてくれたこと。何気なく声を掛けたら快く引き受けてくれました。助手というより、もうひとりの講師でした。

正直、この場所に集まっている人たちのことについて私はあまり知らなかったのですが、当日が少し不安でした。でも彼はベテランの先輩です。メンバーの事をよく知っていて、話をしたり盛り上げたりすることが上手で、とても頼もしかったです。私自身の不安を減らしてくれて、さらにバリ島の話と一緒にすることができ、彼のお陰で終了できたといっても過言ではないです。

私には最近つくづく「障害者」という概念が分からなくなっています。もちろんハンディというものは分かります。でも障害者として認定されていなくても、誰しもそれぞれ苦手な事や得意な事があります。完璧な人なんていないです。それ自体を嘆くより、苦手とどう付き合うか、周りの人とどう共有して支えあうかということが必要なのかなあと。このたまり場は、今生きている人みんなに必要なのかな、と感じています。

『夕刻のたまり場』や『やりたいこと講座』は、やさしさにあふれた場所です。このゆめ・やりたいこと実現センターが継続され、多くの人にこの取り組みを知ってもらいたいです。

#### —家族より—

- ・手先が器用な方ではないけど、いろいろなものを作って帰ってくる。特に俳句の講座が好きな様子。
- ・帰宅すると、「見てよ！」とは言わないけど、必ず講座で作った作品をカバンから出して自分で飾る。
- ・精神障害者家族会では月1回集まっているいろいろな話をしているけど、まだまだ精神的にしんどい。ちぎり絵講座に障害のある人たちと一緒に参加し、簡単な手作業をしながら話ができることで気持ちが楽になる。重たい荷物を降ろせる場所なので、これからもずっと参加したい。
- ・「助手としてバリ島の話をする」と言って、うれしそうに自宅にあるバリ島のおみやげを持って参加した。頼りにされることがとてもうれしいようで、そんな出番を作ってもらえたこともありがたい。
- ・今までひとりではできなかったことや関心のなかったものも、講座に参加して興味が広がったようで楽しかったと話しているのがうれしい。

#### <まとめ・配慮した点・工夫した点・変化>

\*54 講座開催し、延べ1057名が参加。

会場：紀の川市41回 和歌山市11回 橋本市1回（西宮市1回）

#### \*地域との協働

54講座の内、43講座は共助のまちづくり協会、麦の郷紀の川生活支援センター、紀の川市精神障害者家族会、青年学級すばらしき仲間たち、スペシャルオリンピックス日本・和歌山、社会福祉法人三水会、ハートフルハウス創、那賀青年学級、伊都橋本青年学級、就業・生活支援センターつれもて、むぎピース、麦の郷和歌山生活支援センター、紀の川市地域おこし協力隊、橋本保健所、障がい者の豊かな青年期を考える会等との協働で実施。

- \*障害のある人の「やりたい！」という気持ちを一番に考えながら、『“支援する・される”ではなく“一緒に”』『多くの人と“一緒に”創る』『ゆめ・やりたいことの実現をみんなで“一緒に”』という3つことを大切にしながら『学び合い』に取り組んだ。
- \*当初は「これをしてみたい」という意見があまり出なかったが、2年目に入り、「あんなことしたい」「こんなことをしたい」という思いが聞けるようになってきていて、希望に添った講座を開催している。
- \*「やりたい！」という願いをもとに、からだを動かせる講座、創作の講座、生活するための学びの講座、聞くだけではなく自分も参加する音楽の講座、趣味を広げる講座など、なるべく偏りのないよう取り組んだ。
- \*平日の昼間を希望する人、平日の夕方を希望する人、土日を希望する人…「ぜひこの講座をしたい！」と希望された人たち自身の可能な曜日や時間に合わせて講座を企画し、みなさんに発信した。
- \*そもそも生涯学習は地域の人たちとともに取り組むことが大切なことであると考え、障害のある人だけではなく、福祉事業所の職員や障害のある人の家族、地域の人にも声をかけて参加してもらった。
- \*精神障害のある人の家族の中でも特に母親は、子どもが発病した時から大きなストレスを受け、自分自身も心の安定を保てないでいる人も少なくない。そのような家族が集まる精神障害者家族会のみなさんからの要望によって生まれた『ちぎり絵講座』。手を動かしながらいろいろな話をして元気になることを願い開催している。今では、障害のある人とともにいろいろな講座に参加し楽しんでいる。
- \*自分の経験を活かして、助手として講師とともに講義をするという講座が実現。打ち合わせをおこなって、ふたりで円滑に講座を進めていくことができた。もともとこのような取り組みをしたいと考えていたが、「詳しいね。助手をしてくれる？」との講師の言葉から実現した。講座ではふたりの掛け合いで楽しく学ぶことができ、助手をしてくれた人にとっても達成感と満足感を味わうといううれしい機会となった。
- \*ひきこもり経験のある人たちがハートフルハウス創の『創カフェ』で働いている。彼らは接客とおいしいコーヒーの淹れ方のプロ。彼らに講師になってもらい、接客とコーヒーの淹れ方を学び、2月11日の「講演会とトークセッション」の日に『ゆめ・やりカフェ』をオープンした。カフェスタッフとして接客等行ったところ、お客様からの評判も上々で「今度はバルをしたい！」との声もある。
- \*講座を受けた地域の人から、「うちの団体にも講師の先生を紹介してほしい。」との要望があり、『トークと絵本のつどい』の講演が2回と『音楽で学ぼう中国の文化（二胡演奏）』の公演が1回実現した。どちらも好評で、地域の人たちからまたいろいろな講座に参加したいという声がある。

(藤本綾子)





# 夕刻のたまり場

## \*たまり場利用者について

2019年4月～2020年2月末まで

- ・46回開所 延べ647名が来所（1回平均14.1名）
- ・実人数 40名
- ・利用者の住所と延べ参加回数

地域	実人数	延べ人数	平均回数
紀の川市	21名	416名	19.8回
和歌山市	4名	101名	25.3回
岩出市	2名	17名	8.5回
海南市	1名	36名	36.0回
かつらぎ町	2名	11名	5.5回
橋本市	3名	44名	14.7回
計	33名	625名	18.9回

・2019年4月～2020年2月（46回開所）

・表の実人数・延べ人数は2回以上の来所者を対象とする

## <夕刻のたまり場の過ごし方>

- ・16:00～18:00 のんびり過ごし、18:00～19:30 まで講座の日 <20回>  
(内、8月14日はポリ袋クッキング講座。ポリ袋を使って夕食づくり)
- ・17:00～100円の参加費で夕食づくりをして18:30ごろからみんなで夕食の日 <22回>  
(内、12月18日は、300円ずつ出し合って忘年会。ボランティアのみなさんと26名で鍋にオープンサンドにぜんざいも！みんなで食べて歌って踊って大満足♪♪♪)
- ・16:00～20:00 のんびりゆっくり話したり好きなことをする日 <4回>  
(内、4月3日には粉河寺にお花見。きれいでした！)

## <ボランティアスタッフについて>

講座の講師をしてくださった人、講座の助手をしてくださった人、連携協議会委員、支援センタースタッフ、障害福祉事業所スタッフなどのみなさんが可能な時に来所し、一緒に料理を作ったり、講座のボランティアスタッフをしてくれたり、話を聞いてくれたり…。ありがたい存在です。

- ・ボランティアスタッフ 実人数…12名 延べ人数…103名
- ・ボランティアスタッフが来てくださった日 46回の内40回

## <夕刻のたまり場についての感想>

—夕刻のたまり場利用者から—

- ・みんなで食べる夕食は楽しいし、おいしい。

- ・年齢も関係なくいろんな出会いがあることがいい。
- ・夕刻のたまり場で人の悪口を言う人がいるけど、たまり場は笑顔で過ごせる場所であってほしい。
- ・みんなと会いたいし、話をするのが楽しいから遠くても来ている。
- ・夜にひとりでいるのは寂しいけど、ここに来たらみんなに会えるのがいい。
- ・講座には参加しないけど、夕刻のたまり場は好き。
- ・夕刻のたまり場のメンバーで友情が深まった。
- ・今まで話していない人と話せるようになった。
- ・支援学校高等部3年の時にみんなで作った劇のDVDをみんなに見せた。みんなは笑ったり「あかねちゃんが出てる！」とか言ったりしながら見てくれた。見てもらってうれしかった。
- ・眠くてぼーっとしていたら「元気の出る曲を聞かしてあげら。」って言って聞かせてくれたのがたまたま『ぶんだら節』。チーム響で踊っている曲だったからつい踊り出してしまった。チームのメンバーの山畑くんと一緒に『やっぱ紀州』と『紀の国やっちょん郷皆唄』も踊ったら、みんな手拍子とかしてくれて盛り上がった。そんな感じになるとは思っていなかったのに、みんなも楽しそうで快感だった。
- ・家にいてもひとりでスマホをいじるかつツムツムをしているか、テレビを見ているくらいで話し相手がないのでつまらない。たまり場に来たら、みんながいていい。
- ・たまり場でみんなと話をしたり、コントをしたり、好きなチューハイを飲んでいると、うれしくてテンションが上がって踊りたくなる。
- ・遠いけど来るのは楽しいから。
- ・みんなで協力し合って料理を作るのが一番楽しい。助け合うのがいい。
- ・たまり場でごろごろ寝るのがいい。
- ・普段作らない料理をみんなで作るのが楽しい。
- ・たまり場があるのを知ってくるようになった。今までは人と話すのが苦手だったけど、今は人見知りしなくなってだれとでも話せるようになった。人に対する苦手意識がなくなったのかなと思う。いろんな講座や料理をするのが楽しい。
- ・『知れてよかった落語の魅力』と『絶滅しくじり動物』のパワーポイントを作ってみんなに見てもらいながら話をした。すごくいいお客さんで(笑)いいタイミングで相槌を打ってくれるし、観る人が新鮮なものに触れたという感じや新しい知識に出会ったという反応が伝わってきた。伝えたいことと知りたいたいことがマッチして「うけた！」という感じがして、すごく達成感と満足感があつた。
- ・名倉さんがポップコーンマシーンを持って来てくれて作らせてもらった。みんなで作って楽しかったしおいしかった。
- ・作業所の職員さんに教えてもらって勇気を出してたまり場に来るようになった。作業所にはなかなか行けてないけど、たまり場に来ると話をしたり好きな料理を作ったりできて楽しい。

#### —ボランティアスタッフより—

- ・自分が行きたくなる場所。みんなに会いたくてたまり場に来ている。自分自身が純粹になって帰れる。
- ・週1回つどうということはいいことだと思う。
- ・私が一番に感じているのはみんなの「やさしさ」。たまり場は「やさしさ」に溢れた場所。

#### —家族より—

- ・たまり場に行って、みんなと一緒に何かをするということが楽しい様子。今まで聞いた事のなかった

人の名前が出たりして“母の知らない世界”があるということがうれしい。遠いけど、お天気が悪くてもバスと電車を乗り継いで楽しそうに行っている。

- ・初めは友だちが行くから行っていたようだったけど、この頃は友だちが行かなくてもひとりで行くようになってびっくりしている。
- ・自分の意思で行くことと休むことを選んでいく。電車とバスで1時間半ほどかかるので帰ってきたら9時半ごろになるけど、楽しそう。
- ・自分が気を許せる場所、待っていてくれる人のいる場所、ゆったりした楽しい場所でコミュニケーションをとることで、自分の気持ちに共感してもらえると安心感から行きたいと思うのだろう。
- ・職場と親子関係だけではなく、いろんな場を持っていること、いろんな場面を持てるということはあるがたい。
- ・いろいろな学びは人と人との交わりから生まれるものだと思う。そんな場所が今までなかったので、『たまり場』が3年で終わるのではなく、ずっと生涯学習の場であってほしい。

### <配慮した点・工夫した点>

- \*夕方からの講座に参加したい人、講座には参加しないけどたまり場でのんびりしたい人、夕食づくりに参加したい人…それぞれのニーズがあるため、好きな時に来所できるようにとの思いから、講座のある日、夕食づくりの日、何もなくてのんびり過ごす日など、「いろいろな水曜日」にした。
- \*講座のない日は毎回夕食づくりをしていたが、夕食づくりに追われみんなと話す機会が少ないため、相談を聞いたりゆっくり話す機会が限られていた。そこでみんなと相談し、トランプなどゲームをしたり、雑談をしたり、希望により相談の時間を設けたり…ゆつたりの日も設定した。

### <変化>

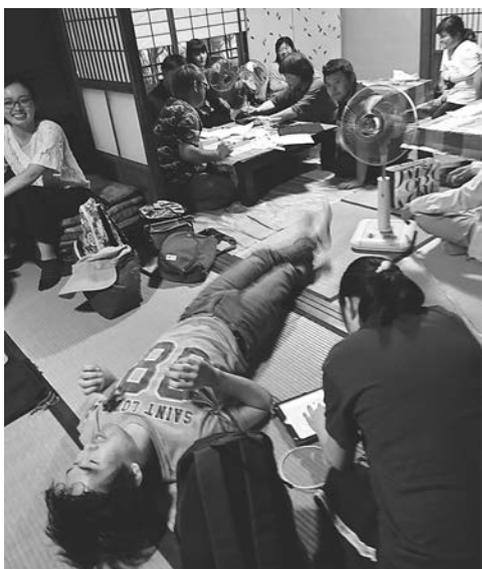
- \*友人と一緒に参加するため電車で1時間半かけて来所している S さん

1年以上、友人が参加する日だけしか来所していなかった。そして、友人が入ってきてからも30分程の間、駅の待合室や山崎邸の門の前で自分なりのきっかけを待っていて、入ってくるということが続いていた。そのことを、もともとの友人だけではなく他の利用者也理解していて、駅まで迎えに行ったり、ある時は声をかけるなど見守りが続いていた。数か月前からは友人が来なくてもひとりで来所し、さっさと入ってきてくれるようになった。その変化を利用者のどの人も感じているようで、「この頃ひとりでも来てるなあ」「さっさと入って来てるわ」などうれしそうに話している。なかなか自分のことを話さない S さんが、最近は旅の事や愛犬のことなど話してくれるようになっていく。

- \*通所している B 型事業所を休んでいる K さん

事業所の職員さんから「こんなところがあるから行けへんか？」と言われて参加するようになった K さん。作業所にはあまり親しく話せる人はいないけど、たまり場に来て話をしたり料理ができると言ってほとんど休まず来所している。この様子をときどき事業所の職員さんが見に来てくれることもうれしそうにしている。

(藤本綾子)



# 連携協議会

生涯学習の活動をされている人など 17 名（連携委員は 15 名。内当事者 2 名を含む）で構成されています。今年度から、和歌山大学教育学部教授、県庁県立学校教育課特別支援教育室室長、県庁生涯学習課企画調整班長にも委員に加わっていただき、連携協議会を 5 回開催（受託期間外 1 回含む）しました。

事業実施に係る協議、「活動報告トークリレー」や「講演会とトークセッション」についての協議、「事業実施による成果物」作成むけての協議やこれからの障害のある人の生涯学習についての議論に加えて、講座の企画や各団体の取り組み等の交流も図りました。また、今年度も様々な企画を『ゆめ・やりたいこと実現センター』ですべて行うわけではなく、各団体のみなさんとともに取り組みました。

## 第 1 回連携協議会 2019 年 4 月 16 日 11 名出席

- 議題
1. 昨年度の活動を振り返って
  2. 5 月 27 日開催の活動報告トークリレーについて
  3. 今年度の取り組みについて
  4. 『こんなことができますアンケート』活用について

報告 ・各団体等からの活動報告 ・2 月からの活動とこれからの講座について

## 第 2 回連携協議会 2019 年 6 月 11 日 16 名出席

- 議題
1. 今年度の連携協議会体制について
  2. 活動報告トークリレーを振り返って
  3. 2018 年度報告書について
  4. 今年度の取り組みと計画について

報告 ・各団体等からの活動報告 ・4 月からの活動とのこれからの講座について

## 第 3 回連携協議会 2019 年 9 月 20 日 10 名出席

- 議題
1. 生涯学習団体や事業所との講座共催について
  2. 今後の生涯学習についての取り組みについて
  3. 1 月開催予定のトークセッションについて
  4. 今年度の「事業実施による成果物」作成に向けて

報告 ・各団体等からの活動報告 ・「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」について  
・昨年度の「事業実施による成果物」について ・6 月からの活動とこれからの講座について

## 第 4 回連携協議会 2019 年 11 月 8 日 12 名出席

- 議題
1. 講演会とトークセッション  
「広がれ生涯学習 わたしたちの物語～夢から実現へ そして今を生きる～」について
  2. 今年度の「事業実施による成果物」作成について
  3. 来年度に向けて

報告 ・各団体等からの活動報告とお知らせ ・9 月からの活動とこれからの講座について  
・「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」について

## 第 5 回連携協議会 2020 年 1 月 17 日 11 名出席

- 議題
1. 講演会&トークセッション  
『ひろがれ生涯学習 わたしたちの物語～夢から実現へ そして今を生きる～』について
  2. 報告書と「事業実施による成果物」作成について
  3. 来年度に向けて

報告 ・各団体等からの活動報告 ・12 月からの活動とこれからの講座について  
・「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」について

# ひろがれ**生涯学習**わたしたちの**物語**



## ～夢から実現へ そして今を生きる～



### カフェと講演会とトークセッション

日時 **2020年2月11日(祝火)**  
**13:10～16:00** (12:00～ ゆめ・やりカフェ開店)

会場 **粉河山崎邸 1F 大広間**

**JR 粉河駅より徒歩3分(紀の川市粉河 853)**

主催：ゆめ・やりたいこと実現センター(社会福祉法人 一妻会(妻の郷))  
後援：和歌山県教育委員会・紀の川市教育委員会・岩出市教育委員会

12:00～13:10 **ゆめ・やりカフェ 開店!!**  
講座でコーヒーの淹れ方、接客などを学び創カフェで実践!!

オープニング13:10～

**ポズック楽団によるチンドンショー**

第一部 講演 13:30～14:30

「インクルーシブな社会をめざす実践」

**津田 英二さん**

(神戸大学大学院 人間発達環境学研究科 教授)  
(神戸大学付属特別支援学校 校長)

第二部 トークセッション14:45～16:00

<コーディネーター>

和歌山大学名誉教授：**堀内 秀雄さん**

<登壇者>

当事者：**松下 隆志さん**

家族：**宮里 千晴さん**

文科省障害者学習支援推進室：**峯 浩之さん**

和歌山県生涯学習課長：**堂本 淳也さん**

コメンテーター：**津田 英二さん**

### 参加者 71名

(内訳) 障害当事者11名、家族14名、障害者の生涯教育関係5名、行政関係9名(内 保健所3名)、  
大学関係4名、学校関係2名、医療関係2名、社会福祉協議会2名、講座講師2名、地域の人2  
名、障害福祉関係16名(内、就業・生活支援センター2名)

### 『ゆめ・やりカフェ』開店!!

1月29日に『おいしいコーヒーの淹れ方講座』を受講したみなさんが、講師をしてくれた創カフェスタッフと一緒にカフェを開店。ご来店のお客様にコーヒー等召し上がっていただきました。

お客様からは「とてもおいしいコーヒーでした」。

「みなさん笑顔で働いていたのがよかったです。またぜひカフェをやってほしいです」。

と好評で、ゆめ・やりカフェスタッフ宮里さんからは「始まる前は、お客さんが何人来てくれるか心配でした。緊張したけど、だんだんなれてきてうまくできるようになってよかったです。今度はお酒を出すバルみたいな体験もしてみたいです」という感想が届きました。

### 『ポズック楽団によるチンドンショー』

オープニングで元気でおちゃめなポズック楽団が登場!

「みんなを元気にしてくれました。メンバーの心から楽しみ、ありのまま感じるままに歌い踊っている姿はたくさんのお客さんのことを思い出させてくれました」。

「人をこんなに笑顔にできるってすごいと感動しました」。

「感動で涙が出てきました」。「圧巻でした」。  
「元気をたくさんもらいました。私も仲間に入れてほしいくらいです」。  
「笑顔あふれるパフォーマンスと津田先生の『場と笑顔』のお話がぴったり合致し、実践のすばらしさを感じました」。  
などの声が溢れ、たくさんの方々に元気を届けてくれました。

## 第1部

### 講演「インクルーシブな社会をめざす実践」（要旨）

津田英二さん（神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授・神戸大学附属特別支援学校校長）

のびやかスペースあーち&よる・あーち（2005年～）、カフェアゴラ（2008年～）、学ぶ楽しみ発見プログラム「KUPI」（2019～）等、地域に拓き、様々な「違い」を受けとめながら推進されている各事業を通して「今、求められる学びのあり方」を考える貴重な機会となるお話でした。

◎2005年から展開している「のびやかスペースあーち：火～土10時30分～16時30分よる・あーち：金曜16時～21時」事業は、神戸大学サテライトとして、子育てを軸に街中で多様な人たちが集まる場。遊び・交流・学習支援・食事など様々な目的で集う子どもや大人の居場所になっている。

その中でも「よる・あーち」での学びの様子を3名の障害のある青年や子どもの具体例をとおして紹介があった。その場所を訪れる目的や障害のある・なし等に関係なく、誰をもそのまま受け入れる「あーち」では、学生とともに安心して他者と向き合う関係づくりが生まれており、学びを保障するコミュニティづくりにつながっている。

◎学ぶ楽しみ発見プログラム「KUPI」事業は、これまでの取り組みの蓄積を活かし知的障害者に大学教育を拓くプログラムモデルの開発を目的に、文部科学省からの委託を受けてとりくんでいる。神戸大学の聴講生制度を適応し、正式に大学の授業としてのプログラムを非障害学生と知的障害学生が4ヶ月間共に学びあうという画期的な試みである。週3日（火曜・水曜・金曜）16時30分～20時20分のカリキュラムでは、一般学生と一緒に学ぶ「障害共生支援論」や教育学・哲学・音楽学・心理学・自然科学などの「専門大学教員による特別授業」、「研究・創作活動」など知的障害者青年のための学びが魅力にあふれている。また、事業担当コーディネーター（1名）やメンター学生（3～6名）の存在など体制面でも充実させている。

2019年度は、8月見学説明会・9月入学試験（面接と作文）を経て11名の知的障害のある青年たちが10月に入学し、新しい学びを経験してきた。受講を続ける中で「むつかしい。講義が眠い」等の感想とあわせて後半の時期には「受講期間が終わるのが淋しい」という声も出された。

また、共に受講していた一般学生からは「知的障害のある学生と一緒に講義で自分がどう振舞っているかわからない」という戸惑いや「最初は自分と彼らとは違うと感じていたが、ライフストーリーを語り合う中で高校時代自由にやりたかったという発言を聞き、自分も同じ思いを持っていたことに気づいた」の声が出された。特に、知的障害のある学生と関わりの深いメンター学生の成長が大きい。

このような具体例を聞き、葛藤や違いから生まれる学びがゆたかに広がることで「違いを受け入れ、なおかつ楽しむことが可能な社会の構築につながることを実感することができました。

#### ◇参加者からの声

- ・「インクルーシブな社会」…とてつもなく大きなテーマだなあと思いながら参加させていただきました。でも参加して目からウロコ。いろいろ考えるきっかけをいただきました。誰ひとり取り残さない

社会を！ひとりぼっちにさせない社会を！笑顔は人を幸せにしますね。力になりますね。

- ・活動や研究を通じて、おもしろくなさっていることがひしひしと伝わってきます。インクルーシブってよく聞きますが、排除の反対とお聞きし納得です。
- ・実践の事例を知ることができて、とても勉強になりました。知的障害のある人が大学で学ぶことが当たり前となる日が訪れてほしいという希望を感じました。
- ・具体的な内容が多く、とてもわかりやすかったです。“ちがいを楽しむ”は心に残りました。

## 第2部 トークセッション

テーマ ひろがれ生涯学習 私たちの物語 ～夢からの実現へ そして今を生きる～

### 1 登壇者

- (1) 松下隆志さん 作業所に通所する当事者・ソーシャルファームもぎたて風車に勤務
- (2) 宮里千晴さん 当事者を支える家族・障がい者の豊かな青年期を考える会
- (3) 峯 浩之さん 文部科学省障害者学習支援推進室
- (4) 堂本淳也さん 和歌山県教育委員会生涯学習課長
- (5) コメンテーター 津田英二さん：神戸大学大学院教授・神戸大学付属特別支援学校校長
- (6) コーディネーター 堀内秀雄さん：和歌山大学名誉教授・本事業スーパーバイザー

### 2 進行及び内容の要約

- (1) 自己紹介と津田講演を聞いての感想をお話してください。
  - ①松下さん—支援学校中学部・高等部を卒業後、やしま学園専攻科に2年、校長に交渉して聴講生制度を新設してもらい9か月間在籍。和歌山産業技術専門学院の総合実務科開設と同時に入学、1年の課程を経て一麦会ソーシャルファームもぎたて風車に勤めて12年。
  - ②宮里さん—障害者の親歴34年。NPO法人 障がい者の豊かな青年期を考える会で生涯学習や余暇活動を進めている。2歳半検診で我が子の障害が分かり愕然としたが、故上杉さんに出会い「この子たちが大人になる頃には、もっともっと教育や福祉が充実して、絶対に生きやすいから頑張ろう」の言葉に勇気づけられた。支援してもらえる活動に感謝している。
  - ③堂本さん—元小学校教員で県行政に異動し、青少年教育と人権・社会教育にかかわってきた。インクルーシブの対義に排除の理論があるが、それは混乱や個人が辛いとき、嫌な時に起こる。自分たちと違うことが楽しい・面白いことが分かれば、状況が変わってくるのではないか。ポズック楽団は2回目だが、やっている本人がいつも楽しそうで、やらされているのではなくやっていると感じた。やりたくてやっているのが生涯学習である。
  - ④峯さん—千葉県在住 元高校教員で今年度より文科省に勤める。今回の報告会参加を希望したのは「ゆめ・やりたいこと実現センター」というメッセージ性のあるネーミングに魅かれたから。障害の有無について他者との違いを楽しむというフレーズについて言えば、性別、国籍などの違いまで視野を広げてそれぞれが違いを楽しめているかが問題だ。一麦会の取組は、大人数を対象に数回ではなく、少人数でも何回も実施されており、講座の回数と種類の多さは突出している。ポズック楽団の印象は、空気を読む力、表情、アドリブがすごく圧倒された。いろいろなところから公演依頼が多く引っ張りだこになるのはよく分かる。
  - ⑤津田さん—宮里さんの話から、制度が変わって人にあたたかい社会になったという側面は確かにあるが、生き辛さが年々増加しているという実感もあるということを感じた。この2つの

方向性が同時に起こっていることをどう考えるか。峯さんが指摘した実施回数の多さが大事なのは、実施回数の多いということは、学びが日常性に根ざしているということの意味しているからだ。学びは、目的がはっきりと定まっているわけではないところから始まるものもあり、そういう学びこそが生きていく中での糧となる場合もある。回数が多いといろいろな人が出入りし、多様な思いや意見も出る。多くの人に理解もしてもらえる機会も増え、実施回数の多さという量は、学びの質へと変化していく。

(2) 講座を通して思い出に残っていること、どんなことが一番よかったですか。

①松下さん—就業後は家に帰っても家族が仕事のため一人で過ごしていた。やることはスマホ・ゲーム・TVだけ。夕刻のたまり場に行くようになり、いろいろな人と話せ、今までとは違う人とも触れ合え話もできる。バリの話の講座では、行った経験も踏まえ助手として話した。できるかなと思ったが、楽しみながらできたから良かった。

※コーディネーターより振られて、母への想いを求められる。少し考えて…

「今まで育ててくれてありがとう」

②宮里さん—夕刻のたまり場には、ほぼ皆勤で参加している。和歌山よりバスと電車を乗り継いで参加している。帰宅は午後9時半になるが、疲れたといいながら楽しんでいる。今までは親がひっぱって活動していた。夕刻のたまり場では、親の知らない世界がありいろいろな人と交流できるのを楽しんでいるのがうれしい。料理講座の講師のことで「今どきの高齢者は元気やで」と笑顔で話していた。

(3) 二人の話聞いて、どのように感じられたでしょうか？

③堂本さん—回数が重要であり、積み重ねることにつながりができ深まってくる。また、受講者と支援者とのつながりもできてくる。県や市、NPO、地域などそれぞれの機関の役割があり、県では少人数の講座の開催は難しいが、できることがあれば支援していく。

④峯さん—実際の取組を見ていないが、最初はきっかけ作りとして無理に参加させられた→活動すると楽しかった→自分たちで企画するまでを目指しているものであると感じた。また、当事者だけでなく支援者の中にも、喜びやハッピーな気持ちがあり、大きな学びがあると思う。

報告会に初めて参加してみて、やりたい事を見つけることが素晴らしいと感じた。

(4) 会場からもご意見、ご感想をいただきたいですね。

1) 藤本さん—講座は月5回ほどのペースで開催し、今年度は現時点で53講座終了、延べ1,033名が参加。約150カ所の関係機関へ広報している。それぞれの機関での取り扱いが違うが、案内を増刷して配布したり、貼り出して周知してくれる事業所もある。

夕刻のたまり場は毎水曜日午後4時～8時まで山崎邸で開いていて毎回14名～15名ほどが来所する。講座に参加したり、雑談や自分たちのやりたい事をしている。夕食作りはみんなで取り組むと楽しくおいしいと好評だ。

2) Mさん—麦の郷印刷で働いているときに、きょうされんの募金活動に参加した。その時には、障害を受容できておらず、他人の目が気になり行くのに抵抗があった。自分がいかに無能な人なのかと思ったが、行動している仲間が笑顔で取り組んでいる姿を見て、意識の変化があった。夕刻のたまり場はそれと同じ笑顔があり、パワーポイントで落語の説明をした時にも、反応が良く

充実感を持った。

自分がいかに無能な人なのかと思う人が少なくなるように、この活動を知ってもらいたい。

- 3) Nさん—型にはまらない書道講座を開催している。障害のある人と活動することで、私の心が浄化される。体の筋肉がフワ～となって笑顔になれる。

ポズック楽団は涙が出てきて、生きていると感じた。

- 4) S Kさん—アート講座を中心に講座を提案している。材料は同じなのに、作品はみんな違う。表現をとおしてひとり一人の素晴らしさを発見できる！幸せな時間になっている。しかし、情報が届かずここには来られていない人達に対して、どうしていくのかも課題だ。休日にするのがなく暇をつぶすために睡眠剤を増量し昼寝することを希望する人もいと聞く。

仕事終わりやお休みに「何もすることがない。楽しみがない。友達がいない。」と感じている障害のある人たちのために、この取り組みへの参加をもっと拡げていきたい。

- (5) これからどんなことをしてみたいですか。希望などがあれば教えてください。

- ①松下さん—僕の夢はみんなが入れる喫茶店をすること。障害者は誰かの手を借りなければ一人では利用できないことがある。そのためにみんなが利用できる場を作りたい。
- ②宮里さん—毎週楽しみにしている夕刻のたまり場がずっと続いてほしい。  
このような研究事業を当事者と家族がしっかり活用して楽しむことで、次の若い世代に事業の必要性と意義をつなげていけるのではないか。
- ③堂本さん—社会教育では、インクルーシブという言葉より、全ての属性（障害、性別、国籍など）の人が一緒にお互い協力しながら共に生きていく「共生」という言葉がよく使われる。  
その中に障害者の生涯学習を位置づけている。県としてできる事は、支援者の育成・市町村への支援・社会教育に携わる人（公民館や団体など）への広報だ。
- ④峯さん—成果報告会の中でも、地域や家族、支援者の肌の温度を感じるのは初めてで、この熱を子どもや家族、支援者に向けて広め、障害者の生涯学習は、障害者だけのためのもではなく共に学び合うものなんだということを意識してほしい。  
一麦会の取組は身近な人たちに向けた地域ぐるみの活動として評価が高く、来年度以降は好事例として全国に発信してほしい。

- (6) まだまだフロアの方から、発言をしてほしい人たちがいらっしやいます。

- 5) S Kさん—県の行政として、どういう役割を持ってお手伝いできるかを考えた。

戦後の高度経済成長期には成功して豊かな生活をめざし、「こうあるべきだ」「こうあらねばならないなどの既成概念が頭の中にある人が多かった。

誰もが一つにつながっていると認識し、違いがあってもこそ人生だ、違いがあっても幸せだと楽しむことが大切だ。

- 6) Yさん—いろいろな繋がりを持っている中で、「一緒にやっぺいこう」とまとめる人、人を引き寄せる人のいることも大事だと思う。

- 7) UHさん—支援学校高等部を卒業する生徒に、面白い、知りたい、学びたいという思いを育てるよう教師も変わるべきだ。

数多くの講座の中から好きなことを選び、参加することのできる当事者を育てることは大切だ。

8) UKさん—生涯学習は何でもできる場なので、いろいろなことをどんどんして行ってほしい。今後もゆめ・やりたいこと実現センターと連携していきたい。

(7) 最後に、和歌山大学と主催者の立場から発言をお願いします。

9) 山崎さん(和歌山大学)—青年学級「すばらしき仲間たち」のメンバーが「学校では他の人と違うことがつらかった。でも、青年学級に参加してみんなに出会って、自分は自分でいいんだ、そう思えるようになった」と話してくれた。津田さんのお話やトークセッションで語り合ったように、このプロジェクトも青年学級と同じ意義をもつと思う。

今日ここで私たちが共有した、「生涯にわたる学びや、ほっとできる仲間との『居場所』の大切さ・すばらしさ」をみんな家庭や職場、学校でいろいろな人と語っていくことで、このプロジェクトの取り組みがもっともっと県内に広がってほしい、ひろげていければ、と思っている。

10) 田中さん(一麦会)—麦の郷として山崎邸をお借りするようになって10年ほどになる。学習するにはここに行けば待っていてくれる人がいて何かができるという場所が大切だ。このような場所の増加と公的機関の障害者の受け入れが進めば各地域で障害者の生涯学習がもっと広がっていく。困難な時にこそ、開拓する人たちがあらわれることは歴史が証明している。

全国では困難な中でも様々な生涯学習に取り組んでいる人たちがいるので、その人たちに学びながら和歌山での活動を豊かにしていきたい。地域には支援してくれる人は多くいるので、その人たちをも光らせながらつなげていくことができればいい。

(8) コメンテーター・コーディネーターからのまとめ

津田さん—場所があり、笑顔があるところに学びがある。

Mさんが提起してくれたことは、体が閉じてしまえば心が閉じてしまうということだ。それでは人とはつながれない。笑顔で体が開かれれば人とつながることができ、学びの扉が開かれる。

学びの前提には笑顔があるのだ。

堀内さん—北欧フィンランドで誕生した34歳の女性首相の言葉を紹介する。「社会の強さは、最富裕層の富ではなく、最も傷つきやすい層に寄り添っているかで計られる」。このセンターの夢は、福祉の教育の先進国では現実なのだ。ジェンダー平等の分野でも153か国中フィンランドは3位、日本は121位と対照的だ。

この2年間のセンターの活動力は、未来への確かな歩みである。福祉と教育は密接につながっている。たまり場という共同学習の拠点があり、まだ参加できていない仲間たちも気軽に参加できる環境をもっと豊かに耕していこう。

このトークセッションで、つながりの輪を発展させる3年目のヒントが多様に語り合えた。一麦会の創立精神に自信を持とう。当事者を真ん中に据え、困難や苦悩を抱えた人々や関係機関との「つながりの質」を深め広げて、新たな年度の活動に挑戦してもらいたい。

◇今回の論点・大切にしたいこと

- ・インクルーシブな社会をめざす上で、それぞれの違い(障害・性別・国籍など)を肯定し、楽しむことは大切なこと。
- ・違いを楽しむ笑顔の向こうに学びが存在する。
- ・障害者の生涯学習は、当事者だけではなく関係するみんなの喜びと学びの場である。

- ・ここに行けば安心・楽しい・何かできるという場の大切さ。
- ・少人数の講座でも、回数を重ねることで質は重さを増し、繋がりや深さと学びの自由度は増す。
- ・参加してみるか→楽しい→これを学びたい→自分もやってみようという変化は大切。
- ・参加主体から自分でやりたいと行動を起こす事業主体になっていく。
- ・取り組みの中心は、必ず当事者とその家族。

#### ◇トークセッションを終えて

ご登壇いただいたみなさん、会場からご発言いただいたみなさん、どの人も生涯学習について熱い思いをもっておられることを痛感しました。

「障害をテーマにしたものの中で、こんなに笑いの絶えないトークセッションは初めてで、とても楽しく学ばせていただきました。」という感想とともに、熱い思いをうまく引き出してくださったコーディネーターの堀内さんについては「絶妙な進行に何度となく笑わせてもらいました。お一人おひとりの人間性を引き出されていてすばしかったです。」「堀内先生の口調で会場がなごみ、話が深まり、心があたたまりました。」などの感想が寄せられました。

この『ひろがれ生涯学習 わたしたちの物語』を通じて、障害のある人の生涯学習についての理解が深まる機会になったならうれしいです。

これからもご登壇・ご発言くださったみなさんはじめ、たくさんの方々と一緒に様々な活動を創っていきたくて心を新たにしました。そして、この活動をもっともっと多くの方々に知っていただくことが重要なことであり課題であると感じています。

(堀内秀雄・大田昌彦・島久美子・藤本綾子)



研究成果 「地域での学び（生涯学習）は、  
受講生、講師、コーディネーターが共に学びを創り合うこと」

文責 生涯学習コーディネーター 野中 康寛

「学び」に関しての価値観を考えるにあたり、学校での「学び」と私たちが行った地域での「学び」（生涯学習）ではどのような違いがあるのかを最初に整理しておきたい。私たちが重要視した地域での学び（生涯学習）は「全方向的な学び」である。企画者（支援者）が講座を開き、受動的に受講生が受講すると言った一方的な学びではなく、学びたい事項を各自が選択し、「このことを知りたい」「体験したい」という主体的な講座をおこなうことに力点をおいて、全方向的な学びに関して取り組んできた。このことによって受講生の主体的な学びは当然のこと、講師自身も講座を楽しむ、他の参加者もその様子を見て楽しむといった三方向の関係性を見ることができた。

具体的エピソードとして、『新聞紙アート講座』や『バリ島の楽しさを味わおう講座』などでは、受講生の一部が講師の助手（サポーター）となり講座を開催した。助手（サポーター）としての講座参加は、受動的な参加である一受講生からの主体的参加者への変化であり、①から④の順序で捉える事ができる。

- ① 知りたいことを表明（自己表現）「夕刻のたまり場の有効性」
- ② またやりたい。もっと深く学びたい「継続した講座の有効性」
- ③ 講師の助手をしたい「思いの具現化」
- ④ 講座を企画したい「主体者から事業者へ」

より深い生涯学習を行う上で、「障害」という要因により学びを抑圧された状態にあった障害当事者が、「自分の意見を言ってもいい」という場所が保障されることが必要である。定期的で開催され、安心して自己を表明・表現できる場が必要である。ここで、重要なキーワードは「安心」であり、自分自身の意見を否定されず尊重される、どのようなことを言っても集団で議論し考え合うことができるという場である。主体的参加の場である「夕刻のたまり場」が創ってきた居場所文化がこれにあたり、表明・表現の土台を形成していると考えられる。

講座では、その分野に精通した個性豊かな講師を招聘し、多種多様な 54 講座を開催し、選択できる様々な講座で講師にふれることで、受講生の中から「また、あの講座をしたい」とのリピーター講座が生まれた。そして、複数回講座を受講する中で講師の助手的役割を果たす受講生も現れた。それは、受動的受講から主体的受講への変化であり、その先として「今度は自分自身が講座を企画したい」（事業者）というプロセスにつながる事が確認できた。

当事者の興味関心からコーディネーターや連携協議会委員が当事者に学びのおもしろさや喜びを伝えたいということが追加され、その道の精通者である魅力あふれる講師陣とふれることでその学びを深めたいという思いが溢れ、主体的学びのめばえという一連のプロセスが確認された。

そして、障害当事者にとっての効果は、講座を通して講師自身の様々な生き方や仕事を知ること、家庭と仕事場（作業所等）の往復ではない人生の豊かさや楽しみを知るきっかけとなった。

上記のゆめ・やりたいこと実現センターでの研究成果により導き出された、障害者の生涯学習に必要な要素として次の点が挙げられる。

- ① 安心できる自己を表明・表現できる拠点施設の必要性
- ② 受動的講座参加から主体的参加への変化のための講座コーディネーターの役割
  - ・ 一方向ではない参加型の全方向的な学びの開発
  - ・ 講師自身の学びの再発見、障害当事者の純粋に「学びたい」という前のめりの受講姿勢から講師自身が学びのおもしろさを再発見する。そのような中で、「もう一度彼らの前で話したい。講座をしたい」と言ってくれる講師の姿も見られた。
- ③ 多様なニーズへの配慮と柔軟性  
講座に参加したのだから講座を受けなければいけないという既成概念を覆し、それぞれのニーズに合わせた自由度が高い場所にする必要がある。
- ④ 講座やたまり場を通じて新たなる自分と出会い変化できる場をコーディネート。  
変化するためには、居心地のいい場所で素の自分を出せる、場所や環境が必要な要素である。
- ⑤ 環境（場所としての魅力）  
上記に述べたように障害当事者にとって生涯学習活動を行う上で「安心できる」ということが必要要素であり、その安心を保障するために無機質な会議室の一室ではなく、温かみのある場所がより有効である。また、自力で通うためには、公共交通機能が不整備である地方にとって駅が近いという環境も必要である。

さらに、生涯学習取り組みによる効果として、話せる、聞いてもらえる場で講座が開催され、受講生相互の集団の力と相まって、社会とつながっているという実感が生まれて、それが人間関係を豊かにしている。障害のあるなしに関係なく生涯学習に触れることで日中活動・仕事が豊かになることが効果として取り上げられる。受講生の中には、日中作業所には通えないけど、講座を通じて社会との接点ができ、孤独ではなく社会に何らかの形で参加している実感をもった当事者もあった。また、次の講座が楽しみ、「水曜日にたまり場があることが楽しみ」という見通しができることで日中活動をより豊かにすることが出来た。日中活動をオンの場とすれば、オフの場でこそ社会との接点が必要であることが明確となった。

また、障害当事者にほとんど関わりのなかった講師が最初是对応や講義内容に対して様々な不安があったものの、講義を受ける当事者のいきいきとした様子を見て障害者観を変えることができた。そして、講師と障害者が会うことによって「あの先生がいる講座ならば一般の講座でも参加したい」という受講生からの声もあり、生涯学習の裾野を広げることができた。

#### ① 人間関係の構築

- ・ 夕刻のたまり場や講座が、「自分の大好きな場」となり、そのことが他者を受け入れることが出来る土壌となる。現に、たまり場や講座では新しく来てくれた受講生に対してみんなが大きな歓迎をする。
- ・ 生涯学習をしたいと思う動機のひとつとして、新たな人間関係を構築したいということが挙げられる。人間が地域社会で生きてゆく中で一番悩みは人間関係についてである。たまり場や講座を通じて家庭や作業所以外での人間関係についての学びができた。

## ② 障害者観の変化

障害のある人は、守られなければならない人たちで、夜遅くまで外出せず早く家に帰るものだという既成概念がある。今回の生涯学習の取り組みの副産物として、障害者に対してのこのような概念を崩すことができた。

### <次年度にむけての課題>

初年度は発見（discover）の取り組み、本年度は広がり（amplifier）の取り組み、最終年度は深み（profound）の取り組みが必要である。

初年度では、場や内容（講座）を提供することで障害当事者の生涯学習に対しての想いや講座を受けたいという要望が多くあることに気付かされた。本年度は1年目で確認できた居場所や講座の必要性やニーズをもとに受講生の主体的参加を進めた。また、1年目から協働で開催している生涯学習団体以外の関係機関にも呼びかけ、福祉事業所等合わせて12カ所、障害者就業・生活支援センター2カ所と協働で講座を開催。さらに、地域福祉協議会等2団体に講師の紹介をして地域の人向けの講座も実現した。

次年度にむけての課題は、「深み」であると考えられる。一定の広がりや関係機関への認知を進めることが出来たが、広く深みのある活動にしなければならない。そのため、既存の生涯学習機関や大学、教育機関と連携を深め、障害当事者の既存の生涯学習機関への参画を目指す必要がある。しかし、一般の生涯学習機関への参加は非常にハードルが高くその原因のとして、以下の点があげられる。

#### ① 多種多様な講座はあるが、その場に障害当事者が参加してよいかわからない。

その場がそもそも安心できる場なのか、受け入れられる土壌があるのか。また、出来なくても否定されず、理解が難しくても受け入れられる場所なのか。

#### ② 健常者は、どこでどんなテーマの講座があるかという情報がありアクセスできるが、障害当事者にとってわかりやすい情報が少なすぎる。

一般の生涯学習機関との連携も深めながら、障害当事者が安心して参加できる場や講座を増やし続けることが必要であり、さらなる広がりや深みを以下のようなことをふまえて創っていくことが重要である。

#### ① 生涯学習への引っ掛かりを創る。

引っ掛かりを創るためには、安心できる周りの人（障害当事者同士、家族同士、福祉関係者等）からの情報、いわゆる「口コミ」が重要で、基本的に安心できる場が少ない障害当事者にとって、口伝えの活きた情報が何よりも必要である。

#### ② 福祉関係者（福祉施設職員、就業・生活支援センター）、教員、家族等の意識改革。

関係者に講座や安心できる場所、オフの場での姿を出前講座等で伝えたり見てもらうことで、いかに生涯学習が必要かを理解してもらう。

#### ③ 障害者の生涯学習系統的システムの構築。



---

文部科学省「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」

社会福祉法人一麦会 麦の郷 ゆめ・やりたいこと実現センター

〒649-6513 和歌山県紀の川市粉河 853-3

TEL/FAX 0736-60-8233

Mail [muginosato-fujimoto@hotmail.co.jp](mailto:muginosato-fujimoto@hotmail.co.jp)

<http://yume-yaritaikoto.jpn.org/>

発行：2020年3月

印刷：麦の郷印刷

---



